

世紀転換期メキシコにおける近代綿業の展開

——「アヒオティスタ」から移民企業家への担い手の移動——

さ とう かん し
佐 藤 勘 治

はじめに

- I ポルフィリアート期における綿業の発展
 - II 主要綿業会社の形成過程
 - III 移民系綿業者の他産業分野との関係
- む す び

は じ め に

メキシコにおける近代綿業の移植は1830年代に始まった。その後1840年代には、商人、金融業者として身をおこし、後に、政府の利権を獲得して業務範囲を広げた「アヒオティスタ」(agiotista、高利貸しの意)の綿業進出によって、メキシコは近代綿工業の定着に成功した。メキシコにおいても、欧米諸国家の多くの場合と同様、綿業部門の工業化が他の分野に先駆けておこなわれたのである。しかも、綿業の機械化は西欧後発資本主義国の場合とほぼ同時期におこなわれたのだった。しかし、綿業部門の工業化が19世紀前半において他の製造業諸分野に波及することはなかった。商業・高利貸し資本である「アヒオティスタ」はアシエンダ経営、鉱山開発等の伝統的産業諸分野への指向が強く、政府の保護下にあつて高利潤をあげられる綿業以外の製造業へ進出することはなかったからである。すなわち、産業資本への転化は進展しなかったのである(註1)。

メキシコ近代綿業が生産力の飛躍的増大を見せ、他の製造業諸分野の工業化を先導することに

なったのはポルフィリオ・ディアス(Porfirio Díaz)治政下いわゆるポルフィリアート期(1877~1911年)、なかでも、その後半期(1890~1911年)においてであった。世界史上では帝国主義の開始期にあたり、アメリカ帝国主義がフィリピン、中米・カリブ海域、メキシコ(主に北部国境州)に進出する世紀転換期において、メキシコにおける初期工業化は綿業部門を牽引力として開始されたのである。その後にメキシコ革命による混乱があつたにもかかわらず、いくつかの代表的なメキシコ現代企業の起源はこの時期にまでさかのぼることができる。たとえば、現代の代表的民族資本家グループ「モンテレイ・グループ」の形成や綿業会社「オリサバ工業株式会社」(CIDOSA)、現代メキシコの代表的百貨店「パラシオ・デ・イエロ」の創設はこの時期におこなわれた。ポルフィリアート後期はメキシコ近代綿業の歴史においては第2段階にあたるものの、工業化の全体的歴史から見れば19世紀前半における近代綿業の成立は例外的だった(註2)。帝国主義諸国の経済的進出と同時期に、帝国主義によって進出される側であったメキシコが綿業を軸として工業化の開始に成功したのはなぜであろうか。

本稿では、対象を綿業に限定してポルフィリアート後期の主要な綿業会社の形成過程と綿業実業家の出自、綿業への進出過程からその特徴を具体的に明らかにし、19世紀前半期の綿業実業家「ア

ヒオティスタ」との性格の異同をみることを通して、帝国主義期という世界史的時代背景のなかにメキシコ綿業の新たな展開を位置づけ、上記の問題に一部なりとも答えることを目的とする。従来のメキシコ経済史研究においては、ポルフィリアート期の外資導入政策（外資導入により経済成長を目指す政策）の一例として、綿業におけるフランス系移民資本の役割が注目されてきた。この視角においてはフランス系移民資本を外資とみなすことで、メキシコ綿業の成長がフランスの経済的進出として語られてきた^(注3)。しかし、アグアスカリエンテス、モンテレイなどに銅、鉛鉱山と熔鉱炉を所有した「アサルコ社」(American Smelting & Refining Co.) など、鉱業部門を中心としたアメリカ資本の帝国主義的進出とフランス系移民資本を同等に論じることはできないはずである。ここではメキシコ綿業の内的発展の一段階として、ポルフィリアート期の綿業を位置づけ、19世紀前半期のメキシコ綿業とのつながりに留意して論じることとする。

(注1) 19世紀前半における近代綿業の移植過程については、拙稿「メキシコ近代綿工業の形成における『アヒオティスタ』の役割」(『アジア経済』第30巻第6号 1989年6月)を見られたい。

(注2) ポルフィリアート期メキシコ綿業に関しては、邦語先行研究として、山田睦男「革命前メキシコ木綿工業における移民企業者の役割——オリサバ地方のケース・スタディ——」(『アジア経済』第9巻第4号 1968年4月)があり、移民企業家の成功の原因を社会学的に分析している。同論文には当時の綿業に関する基本的な統計が紹介されているので参照されたい。また、スペイン語文献では、Keremitsis, Dawn, *Industria textil algodonera en el siglo XIX*, メキシコ, Secretaría de Educación Pública, 1973年があり、多角的分析がおこなわれている。

(注3) Cosío Villegas, Daniel 編, *Historia moderna de México: el Porfiriato, vida económica*, メキシコ, Hermes, 1965年の研究が、こうした研究

傾向を代表するものである。

I ポルフィリアート期における綿業の発展

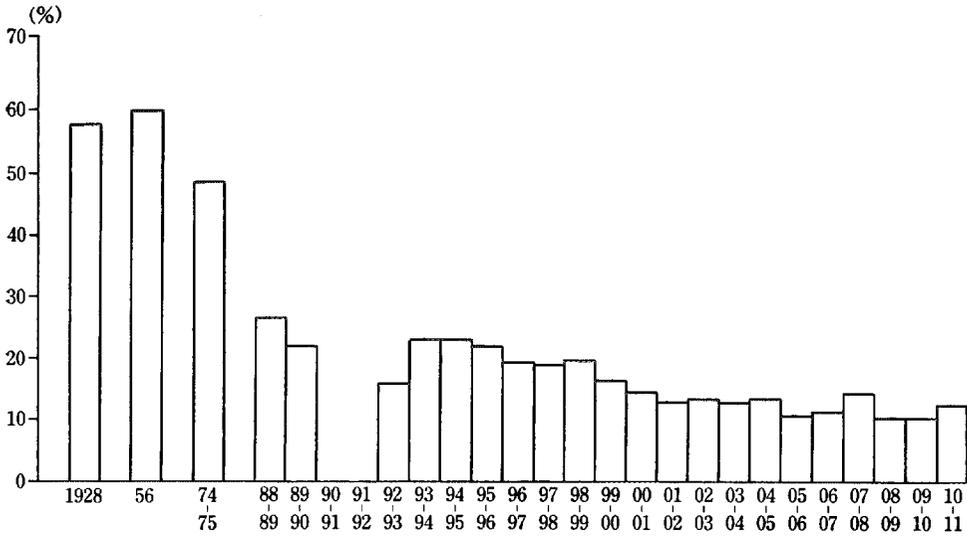
この節では先行研究によりながら綿業発展の概要と要因を確認したうえで、当時の主要綿業会社の概要を所有者の変遷とともに示すこととする。

1877年から1911年すなわちポルフィリアート期において、繊維部門におけ織機、紡錘、労働者数はそれぞれ約3倍に増加したと推定されている。なかでも1880年代末以降の増大がめだっている^(注1)。同時期の人口は約1000万から1500万人と大きく伸びているが、綿布生産の伸びはこの人口の伸びを大きく上回るものであった。

こうした綿布生産の拡大に伴って、輸入品目構成は大きく変化することになる。第1図にみられるように、総輸入高に占める繊維製品の割合は1820年代から70年代に半分以上であったものが、88年度には約26%になり、その後漸減傾向をたどり、20世紀にはいると約10%に落ち着くことになる。綿布にだけ注目すると、1910年度はわずかに2.8%であった^(注2)。絶対量においても、1888年度の約4700万平方苺から、1900年度には約3000万平方苺、1908年度には1600万平方苺と減少している^(注3)。輸入はイギリスからがほとんどを占めたが、北部諸州に限ってみればアメリカ合衆国から輸入された^(注4)。

原料となる綿花の生産は北部ラグーナ地域を中心として伸びる。その結果、消費原綿量に占める輸入原綿の割合は1888年度の45%から1900年代には20%台に徐々に低下する。メキシコは20世紀の後半には綿花が輸出品目の第1位を占めたのであり、ポルフィリアート後期においても生産能力は国内消費量を賄うには十分だったと言われてい

第1図 総輸入額に占める繊維製品の割合 (%)



(出所) Alvarado Gómez, Armando; Inés Herrera Canales, *Principales productos del comercio exterior del siglo XIX*, Cuaderno de Trabajo, 47, メキシコ, INAH, 1985年, 12~16ページより算出。

(注) 1890~91, 91~92年についてはデータなし。

る^(注5)。しかし、国内消費原綿の供給を国産原綿で賅うまでには当時は至っていなかった。綿花の輸入は綿業の急速な展開を意味するというよりは綿花生産体制、技術の遅れを意味するものであり、政府の農業軽視の政策を示すものであった。また、隣国のアメリカ合衆国が綿花輸出国であったこともその要因として重要である。

メキシコは19世紀を通じてイギリス経済圏に取り込まれることはなく、比較的自立的な経済体制を形成しうる立場にいた。第一次産品輸出は南部を中心にしておこなわれつつあったが、地理的多様性にも助けられて、アルゼンチン、ブラジル、カリブ海地域のように全国規模でのモノカルチャー化はおこななかった。さらに、アメリカ合衆国の経済的進出は北部において19世紀末以降開始されたものの、中央部への進出はいまだおこなわれていなかった。メキシコ綿業の発展はラテンアメリカ諸国のなかでは例外的なこうした経済環境に

助けられていた。

綿業は政府の保護貿易政策により手厚く保護されていた。輸入綿布に対する関税率は、高価維持を期待する綿業者の思惑により、この時期一貫して100%以上の水準を保っていたのである。これに加えて、1905年まで銀本位制を採っていたメキシコは1870年代以降、銀価格の暴落(1870年から1910年の40年間に半分以下となる)による輸入綿布の高価格化を経験していた^(注6)。このため、国産綿布は高価格であっても輸入製品と競争でき、綿業は最も利益の上がる分野となっていた。この時期に設立された大規模な企業はおしなべて年10%程度の高配当をおこなっている。なかでもCIDOSAは1894年から99年にかけて平均20%以上の配当をおこなっていた。こうした利潤の増大は工場の設備近代化による生産力の増大にも寄与していたと考えられる。主要な工場の動力はこの時期電力に移行した^(注7)。

さらに、ポルフィリアート期メキシコの政治的安定は綿業部門に留まらず、経済の全般的発展の基礎となった。政治的安定はメキシコ独立以後この時期に初めて達成され、30年以上続いたのである。この間、州間関税の廃止(1897年)や鉄道網の建設などがおこなわれ、国内市場の形成が進展した。人口は1880年の約1000万人から1910年には約1500万人に増大したが、それに加え、荒蕪地の私有地化政策によるインディオ共同体の解体の進行、アシエンダ、ランチョの拡大に伴う労働者層の増大は綿布市場を一層広げたと考えることができる。

次に当時の主要な綿業会社を概観しておこう。第1表は19世紀末から20世紀初頭にかけての主要な綿業会社の所有する綿工場の一覧である。綿工場の選定にあたっては、1895年における売り上げ高を基準(半期で28万ペソ以上の売り上げがあったものを取り上げた)にしたうえで、それ以降から1911年までに建設された綿工場に関しては、その規模を考慮してつけくわえ、その所有者の変遷を表わしたものである。これらの工場は設立の時期によって大きく3つに分けられる。「ココラパン」、「サン・アントニオ・アバド」、「ミラフローレス」、「ヘラクレス」、「ラ・マグダレナ」は1845年当時の主要20工場一覧のなかにも現われる工場で、黎明期から綿業をになってきた歴史を持っていた^(注8)。もう1つは1880年代以降に設立された大規模な工場である。「サン・ロレンソ」、「セリートス」、「リオ・ブランコ」、「メテベック」、「サンタ・ロサ」がこれにあたる。それ以外の工場は1850年代から70年代にかけて設立されたと推定できる。この表から、ポルフィリアート末年において、綿業部門ではその主要な工場が株式会社化(1884年新商法によって株式会社制度が誕生した)された企業に取

り込まれていたことがわかる。

1845年の主要工場の所有者たちはこうした株式会社化の動向以前から徐々に姿を消している。たとえば、当時第5位の規模を持った「ミラフローレス」の所有者であったデル・リオ、第3位の規模であった「ラ・マグダレナ」の所有者ガライ(Garay)らの「アヒオティスタ」は株式会社化以前から名前を消している。一方、当時第1位であった「ココラパン」のエスカンドンは株式会社化直前まで名前をとどめている。後に見るように、「ヘラクレス」のルビオも同様である。「アヒオティスタ」にかわって登場したのはフランス系を中心とした移民企業家であった。

(注1) El Colegio de México, *Estadística económica del Porfiriato: fuerza de trabajo y actividad por sectores*, メキシコ, 1965年, 106ページ。繊維業は綿業部門がほとんどを占めていた。

(注2) El Colegio de México, *Estadística económica del Porfiriato: comercio exterior de México, 1877-1911*, メキシコ, 1960年, 224ページ。

(注3) Alvarado Gómez, Herrera Canales, 前掲書, 38ページ。後に紹介する「アトリスコ産業会社」は綿布を南アメリカ、特にコロンビアに輸出していた。

(注4) Keremitsis, 前掲書, 168ページ。

(注5) 同上書 176ページ。

(注6) 同上書 171ページ。

(注7) 同上書 100~108ページ。

(注8) 1845年時における主要な綿企業とその所有者については、拙稿 前掲論文を参照のこと。「ココラパン」は1877年時においてメキシコ最大の規模を誇り、1万3000錠、300織機を備えていた。

II 主要綿業会社の形成過程

株式会社化以降の綿業の担い手を検討するため、この節ではまず上位5企業に関してその設立の経緯を簡単に示そう。

ポルフィリアート末年、綿業部門の資本額からみた上位5つの主要な綿業会社は次のとおりであった。「オリサバ工業株式会社」(Cia. Industrial de Orizaba, S. A.。略称 CIDOSA),「アトリスコ工業株式会社」(Cia. Industrial de Atlixco, S. A.。略称 CIASA),「マニファクチャー工業株式会社」(Cia. Industrial Manufacturera. 略称 CIMSA),「ベラクルス工業株式会社」(Cia. Industrial Veracruzana, S. A.。略称 CIVSA),「サン・アントニオ・アバド工業株式会社」(Cia. Industrial de San Antonio Abad, S. A.。略称 CISAASA)である。推定によれば、1910年に存在した綿工場145のうち、これらの5企業は約1割にあたる14工場を所有し

ていたが、労働者数では36.7%、織機数では36.2%、紡錘数では30.2%を占めていた(註1)。

1. CIDOSA

1883年にあるフランス人商人グループが独占的販売を意図して、国産のプリント地とマンタ(manta。伝統的大衆用布地)の翌年生産分の買取契約を主要な大工場と結んだため、対抗上、他のフランス人商人グループが工業への参入を決意し、オリサバにあった工場「セリートス」を買取った(註2)。CIDOSAは、その後、後者のフランス人商人によって1889年に設立された。同じオリサバに「サン・ロレンソ工場」(1881年設立)を所有していたブラニフ(Thomas Braniff)は1889年にCIDOSA

第1表 主要綿工場の所有者の推移

	1893 ¹⁾	1895 ²⁾	1913 ³⁾	所在州
サン・ロレンソ (1881)	ブラニフ	CIDOSA	CIDOSA	ベラクルス州
セリートス (1882)	マニファクチャー社	CIDOSA	CIDOSA	ベラクルス州
リオ・ブランコ (1892)	CIDOSA (1889)	CIDOSA	CIDOSA	ベラクルス州
ココラバン (1839)	エスカンドン兄弟	エスカンドン父子	CIDOSA [1899]	ベラクルス州
サン・アントニオ (1883)	ノリエガ兄弟	CISAASA	CISAASA	連邦区
ミラフローレス (1840)	ロバートソン[1870]	ロバートソン	CISAASA [1896]	メキシコ州
ラ・コルメーナ	アスルメンディ母子	アスルメンディ母子	CISAASA	メキシコ州
バロン	アスルメンディ母子	—	CISAASA	メキシコ州
メテベック (1902)			CIASA (1899)	プエブラ州
サンタ・ロサ (1899)			CIVSA (1896)	ベラクルス州
サン・フェルナンド	CIMSA	CIMSA	—	連邦区
ラ・テハ	—	CIMSA	—	連邦区
ヘラクレス	CIMSA	CIMSA	CIMSA	ケレタロ州
ラ・プリシマ	CIMSA	CIMSA	CIMSA	ケレタロ州
サン・アントニオ	CIMSA	CIMSA	—	ハリスコ州
プロビデンスシア	ゴンサーレスの相続人	ゴンサーレスの相続人	ゴンサーレスの相続人	グアナファート州
ラ・レフォルマ	ゴンサーレスの相続人	ゴンサーレスの相続人	—	グアナファート州
ラ・エスコバ	フェルナンド・バージェ兄弟	フェルナンド・バージェ兄弟	—	ハリスコ州
アテマジック	フェルナンド・バージェ兄弟	フェルナンド・バージェ兄弟	グアダハラ工業会社 (1889)	ハリスコ州
リオ・ブランコ	フェルナンド・バージェ兄弟	フェルナンド・バージェ兄弟	グアダハラ工業会社 (1889)	ハリスコ州
イクスベリエンシ	フェルナンド・バージェ兄弟	フェルナンド・バージェ兄弟	—	ハリスコ州
ラ・マグダレナ	ベルメヒージョ社	ベルメヒージョ社	ベーヤンジーン社	連邦区
ラ・エストレージャ	マデロ社	マデロ社	パーラ工業会社 (1902)	コアウィラ州

(出所) 1) México, Secretaría de Fomento, Dirección General de Estadístico, *Anuario estadístico de la República Mexicana, 1893*, メキシコ, 1894年, 巻末表。

2) México, Secretaría de Fomento, Dirección General de Estadístico, *Anuario estadístico de la República Mexicana, 1895*, メキシコ, 1896年, 巻末表。

3) Archivo General de la Nación 所蔵, Serie: Departamento de Trabajo, Vol. 68, Exp.6, F. 1。

(注) — および空欄は、上記資料に現われないもの。()の数字は、それぞれの設立年。[]の数字は所有の移動した年。

が設立されると、CIDOSA にその株式と引き換えて同工場を譲り、その主要な株主として社長に就任した。CIDOSA は1889年から「リオ・ブランコ工場」の建設を始め、92年には操業を開始した。さらに、19世紀末にはエスカンドン家の所有する同じオリサバにあった伝統のある「ココラパン工場」を買取り、改修工事をしたうえで1909年度には改めて操業させている(注3)。新工場の建設や買取の結果、ポルフィリアート期末年にはCIDOSA は総計10万錘、4000織機、10プリント機、労働者数6000人を擁する、メキシコ第1の綿業会社であった(注4)。資本金も創設時には250万ペソであったが、1908年には1500万ペソとなった(注5)。

初代の社長であるブラニフは1830年ニューヨーク生まれのアイランド系アメリカ合衆国人で、1865年にメキシコ市ベラクルス間の鉄道建設のために技師としてメキシコにわたり、その後、外国人鉄道労働者用消費物資や鉄道資材の輸入業に携わることで資金を稼ぎ、「メキシコ鉄道会社」の重役となっていた。綿業進出以前から、綿業機械の輸入も手がけていた。ブラニフは綿業以外にも、鉄鋼業、製紙業、銀行業、鉱山業など広く投資をおこなっている(注6)。なかでも、ブラニフがメキシコ側代表を務めた「メキシコ工業金融会社」(Société Financière de l'industrie au Mexique. 略称 SFIM) はジュネーブで1900年に設立された対メキシコ工業投資会社(資本金500万³)であり、CIDOSA にも投資をおこなっている。SFIM はパリとメキシコ市に取締役会を置き、パリの代表はノエツリン(Noetzelin)であり、メキシコの代表がブラニフであった(注7)。

このように、ブラニフはフランスとのかかわりが強い。CIDOSA の設立にあたってその中心となったのは、前記のようにフランス系の移民であ

ったことがその原因であろう。1905年にブラニフが死亡すると、社長にはエンリーケ・トロンがついた。トロン(Tron)家は、19世紀中葉にフランス南部バルセロネットから移民した商人であり、メキシコで最初の百貨店「パラシオ・デ・イエロ」を1891年に創設している。1911年の取締役名簿によれば、CIDOSA の取締役の全員がフランス系であった。また、パリにはCIDOSA の代表としてSFIM の重役でもあったオリビエ(Ollivier)がいた(注8)。

2. CIASA

CIASA は、メキシコ市で綿業に従事していたメキシコ人、バロソ・アリアス(Barroso Arias)が1898年に、バルセロネット出身のガルサン(Agustin Garcin. メキシコ・ナショナル銀行[Banco Nacional de México] 取締役)に呼びかけて、翌年1月にメキシコ市において設立した会社で、プエブラ州アトリスコに「メテペック(Metepec)工場」を建設した。1902年に操業したこの工場は、ポルフィリアート期末年において、紡錘数(3万6852)、織機数(1570)において単独の工場としてはメキシコ第1の規模をもっていた。

プエブラ州は伝統的にメキシコ第1の綿業地域であったが、伝統的中心地は州都プエブラ市であり、同市に居住するスペイン人が綿工場を所有、経営していた。これに対して、CIASA の「メテペック工場」は資本調達も経営も、プエブラ市以外の場所でおこなわれた点で、特異な位置を占めていた。設立時の資本金は200万ペソであったが、株式はメキシコ市で売られたほか、CIDOSA 同様SFIM に資金調達を依頼し、パリ、ジュネーブでも販売された。その結果、段階的に増資がおこなわれ、1907年には資本金は600万ペソになった。所有者の国籍別の株式数は、フランス人が2万

4000株、スペイン人が1万7000株、アメリカ人5000株、メキシコ人3000株、イタリア人1000株（総計6万株、1株額面100ペソ）であった。1920年代には、アメリカ合衆国で資金調達のための宣伝映画が上映されている。主な株式所有者には、プラニフ、エンリーケ・トロン、イニーゴ・ノリエガ＝ラソ（Iñigo Noriega Laso）らがいた^(注9)。

1911年における取締役会名簿では、社長パロツ・アリアス、ガルサン、ピメンテル＝イ＝ファゴアガ（Pimentel y Fagoaga、アセンダード：大農園主）、カンツ＝トレビーノ（Manuel Cantu Treviño、「モンテレイ鉄鋼会社」の取締役）などがいる^(注10)。

3. CIMSА

CIMSА は、フランス人ブルン（Agustin Brun）、ガルサン、シニョレ（Jose Signoret）およびメキシコ人アンヘル・レルド＝デ＝テハーダ（Angel Lerdo de Tejada）らが、スペイン人「アヒオティスタ」で早い時期から綿業に従事していたルビオ（Cayetano Rubio）とともに設立した株式会社である。1895年の資料によれば、連邦区に「サン・フェルナンド」綿紡績・織布工場、「ラ・テハ」プリント工場（ただし、休止中）、ケタロ州に「ヘラクレス」綿紡績・織布工場、「ラ・プリシマ」織布工場、「サン・アントニオ」プリント工場を所有していた。この5工場、約4万3000錘、1600織機、9プリント機であり、資本金は430万ペソで、メキシコ第3の綿業会社であった。企業の設定年などは不明である^(注11)。

4. CIVSA

CIVSA は1896年レイノ（Honorato Reynaud）、ケール（Engenio Caire）、マヌエル（Joaquin Manuel）ほかのフランス人らメキシコ市の被服商によって設立され、株主の全員がフランス人だったと言われている。同会社はCIDOSA同様、オリ

サバに工場「サンタ・ロサ」を1898年に完成させている。この工場は「メテペック」に次ぐ規模を持ち、1907年において、3万3000錘、1400織機、4プリント機、労働者数約1800人を擁し、資本金335万ペソであった。1911年における取締役会のメンバーは、レイノ社（Reynaud）、ロベール社（Robert & Co.）、マヌエル社（Manuel）、ジャック社（P. & J. Jacquez）、ブロン社（M. Bellon & Co.）、リショ社（P. Richaud & Co.）、デジエ社（J. Desdier & Co.）の代表であった^(注12)。

5. CISAASA

CISAASA は1892年スペイン人ノリエガ＝ラソを中心にして設立された（1911年時の資本金350万ペソ）。彼は、スペイン北部アストゥリアス地方で、1853年に生まれ、67年にメキシコ市の伯父をたよってメキシコに移住する。鉱山経営やチャルコ湖の埋め立てによるアシエンダ経営をおこなっていた他、「サン・ラファエル製紙会社」の経営にも参加している。1885年にはスペイン人が連邦区に所有する綿工場「サン・アントニオ・アバド」を買取り綿業に進出する。さらに、19世紀前半からの歴史を有する代表的な工場「ミラフローレス」（メキシコ州）を、1896年にCISAASAに統合する。同工場は、デル＝リオ（del Rio）から同工場の技師であったロバートソンに所有が移行していた。ロバートソンは同会社の重役となった。取締役には、CISAASAの創設にかかわったガルサンやパロツがいた。CISAASAは上記の2工場のほか、アスルメンディ（Azulmendi）家の所有していた2工場も取得した。この2工場は同一地域にあり、メキシコ州では最大の規模であった^(注13)。

以上の5大綿業会社の特徴をまとめてみよう。第1に、メキシコ人綿業者が関与する場合もあつ

たが、圧倒的に移民企業家の主導のもとに設立された。なかでもフランスからの移民が中心であり、スペイン系、例外的にアメリカ系が含まれる^(注14)。第2は立地上の特徴である。各企業は、人口が集中し、商工業が盛んであったベラクルス州、メキシコ州、連邦区、プエブラ州のメキシコ中央部に工場を建設し、会社自体は連邦区に置いている。なかでも、ベラクルス州オリサバに大規模な工場が集中している。第3に、これらの企業家は商人から出発し、綿業を経て他の工業部門に進出している。これらの特徴は、他の綿業会社にもあてはまるのだろうか。まず、第1と第2の特徴について、他の綿業会社を含めて、少し詳しく論じよう。第3の特徴については節を改めて論じる。

フランス系綿業者の場合、アルプス地方の寒村地帯バルセロネットからの移民がほとんどを占めていた。フランスからの移民全体としてみてもバルセロネットからの移民は多い。1900年のメキシコ在住フランス人約4000人のうち80%が、また、1910年には約6000人のうち80%がバルセロネット地域からであった^(注15)。バルセロネットからの移民は、アルノ兄弟が1821年にメキシコに渡ったことから始まり、45年にケール (Caire) とジョフレ (Jauffred) が商業で成功を取め、故郷バルセロネットに帰ったことをきっかけに増大した。すでに名前をあげているレイノ、トロン、シニョレ、ガルサンなどが代表的なバルセロネット出身の移民である。彼らはメキシコ市を拠点に繊維製品販売店を経営した。1870年頃にはフランス系商店は小売を扱い、ドイツ人の経営する被服卸売りから買いつけていた。しかし、普仏戦争を契機に両者間のあつれきは高まり、本国からの資金援助を得てフランス系商店は卸売りに進出していった。また、

フランスの干渉戦争時に開設された大西洋航路が運賃を引き下げることに貢献した。ドイツ系の被服商は1892年に最後の店を閉め、それ以降フランス系商店が繊維製品の販売を独占するようになった^(注16)。

統計に表われる限り商業はその大部分が外国人によっておこなわれていた。1892年において全国に150のフランス系商店があり、そのうち118はバルセロネット出身者が経営していた。1899年の報告では、連邦区にある212の商店のうち実に172が外国人の所有で、フランス人が44、スペイン人が42を占めていた。そして、フランス系の多くはバルセロネット出身であった。また、1910年にはフランス系200のうちバルセロネット系は150を占めた^(注17)。

バルセロネット出身者はメキシコに渡ると同郷人の経営する商店に徒弟として住み込みで働いた。その間に、スペイン語や商売の方法を学び、年期が明けると店から独立資金が提供された。はじめは資金力に乏しいが、メキシコでの彼らの信用は厚く、成功するものが多かった。すでに言及している「パラシオ・デ・イエロ」、「プエルト・デ・リベルプール」、「プエト・デ・ベラクルス」などの大規模商店は、それぞれ、トロン家、エブラール (Ebrard) 家とミシェル (Michel) 家、シニョレ・オノラト商会の経営であり、彼らはバルセロネット出身者であった^(注18)。

フランス系移民企業家とフランス本国との経済的つながりは、SFIMにみられるように大きいものがあつた。これらの5大企業におけるフランスからの資本流入は約半分と推定されている^(注19)。しかし、ここで注意しなければならないのは、経営の主体は移民であり、また、CIASA の場合から推定できる有力株主も同様であることである。

第2表 プエブラ州、連邦区、ベラクルス州における繊維業（1895～1929年）

	1895 ²⁾		1900～01 ¹⁾		1910～11 ¹⁾		1920 ²⁾		1929 ²⁾	
		(%)		(%)		(%)		(%)		(%)
工場数 ¹⁾										
全 プ 連 ベ	112		153		145		120		139	
エ 邦	16	14.29	29	18.95	44	30.34	44	36.66	51	36.69
ラ ク ル ス	14	12.50	14	9.15	12	8.27	18	15.00	21	15.11
	9	8.04	12	7.84	14	9.65	12	10.00	10	7.19
労働者数										
全 プ 連 ベ	19,576		27,767		32,147		37,936		38,881	
エ 邦	2,199	11.23	3,987	14.36	8,142	25.33	10,164	26.79	10,537	27.10
ラ ク ル ス	2,919	14.91	2,487	8.95	5,088	15.83	7,375	19.44	5,646	14.52
	3,003	15.34	4,992	17.98	7,194	22.38	6,437	16.97	6,937	17.84
生産量 ⁴⁾										
全 プ 連 ベ	4,561		11,582		15,091		10,247		34,421	
エ 邦	539	11.82	2,033	17.55	5,517	36.56	4,035	39.38	11,314	32.87
ラ ク ル ス	945	20.72	1,904	16.44	1,699	11.26	1,349	13.16	5,489	15.95
	783	17.23	1,969	17.00	3,182	21.08	1,257	12.27	4,203	12.21

(出所) Gamboa Ojeda, Leticia, *Los empresarios de ayer: el grupo dominante en la industria textil de Puebla, 1906-1929*, プエブラ, Universidad Autónoma de Puebla, 1985年, 32ページ, 表2/México, Secretaría de Fomento, Dirección General de Estadística, *Anuario estadístico de la República Mexicana, 1895*, メキシコ, 1896年, 巻末表より作成。

- (注) 1) 繊維業全体での数字である。しかし, ほとんどが綿業部門だと考えられる。
 2) 綿業部門だけの数字である。1895年の生産量は半期(6カ月)分である。
 3) 1895年, 1900年度, 1910年度の数字は存在する工場数, その他の場合は稼働中の工場数である。
 4) 1929年をのぞいて単位は1,000ピエサ。1929年はkgである。

上記の5大綿業会社の場合, スペイン系移民が主導権をとったのは CISAASA のみであるが, 綿業全体においてはスペイン人の役割は大きい。特に最大の綿布生産地帯プエブラの場合, ガンボアによれば, CIASA の場合を除く20世紀初頭の綿業者127人のうち98人がスペイン人であり, 20人がメキシコ人, 9人がフランス人であった。第2表で表わされているように, 1910年度におけるプエブラ州の繊維生産量は全国の36%を占めている(注20)。

スペインからの移民は, 1853年から1903年にかけて本国が移民政策をとったため, 毎年15万人以上が流出した。1906年から10年の平均でも約14万人であった。メキシコには1887年に約1万人, 1900年には約1万6000人, 10年には約3万人が居住していた。主にスペイン北部アストゥリアス出身が多い。彼らは多くの場合メキシコで資金を

蓄え, 投資をおこなった。この点で, フランス系よりも国内資本的性格が際立っている。ただし, スペイン人としての意識は高く, 文化的伝統を維持し, 社会生活上も特別なグループを形成していたといわれている(注21)。

以上の点から, これまで言及した第1表中の移民系企業およびプエブラの移民企業者の工場で, メキシコの綿布生産の半分以上がおこなわれていると推定できる。つまり, メキシコ人の所有する綿工場はメキシコ綿業全体のなかで支配的なものとはなっていなかった。第1表のなかでメキシコ人の経営する工場だと確定できるのは, マデロ(Madero)家の経営するコアウィラ州の「ラ・エストレージャ」のみである。この会社はメキシコ人所有という点だけでなく, その成り立ちにおいてこれまでみてきた移民系の大会社と大きく異なっており, メキシコにおける新しい型の企業家の

誕生を示すものである。

ここで、マデロ家と綿業についてふれ、メキシコ人経営の代表的綿業会社は移民系の企業とどう異なるかについて考えてみよう。これは、北部という立地の違い、歴史的背景の違いによることが大きい。

マデロ家は、メキシコ革命において、最初の大統領となったフランシスコ・マデロを出したことでメキシコ史上有名であるが、一方で、現在にまで続くメキシコ有数の企業家、資産家一族でもある。F・マデロの祖父エバリスト・マデロは1860年代から70年代にかけて北部の中心地モンテレイにおいて商人として頭角を現わし、65年には「マデロ商会」を設立する。当時のモンテレイはアメリカ合衆国での南北戦争の影響により、アメリカ合衆国南部諸州との交易で繁栄していた。当時「マデロ商会」はアメリカ合衆国から綿花を輸入し、マタモロス経由でヨーロッパに輸出をおこなっていた。20世紀初頭には、綿業の他、モンテレイの鉄鋼業、30以上の鉱山、トレオン金属会社、地元の銀行に投資をおこなっていた^(注2)。

綿業への進出は1860年代末から70年代初頭にかけてコアウィラ州パラスにある「ラ・エストレージャ」を買取ったことで始まる。同時に、同地区のアシエンダ「エル・ロサリオ」、「サン・ロレンソ」も入手し、前者で綿花栽培をはじめ、後者でぶどう栽培、ワインの生産をおこなった。つまり、綿花を取り扱う商人から、綿花栽培、綿布生産までを扱うことになったのである。アメリカ合衆国において近代的綿花栽培法、農園の経営法を勉強したF・マデロは、帰国後、「エル・ロサリオ」の経営にあたり成功を収めている。1902年「ラ・エストレージャ」はマデロ家の組織した株式会社「パラス工業会社」の経営下におかれた。

また、マデロ家は、「ラ・エストレージャ」のほか北部の3つの綿布工場で生産された綿布の商取引をおこなうことで、北部の綿業を支配下に置いたと言われている。

マデロ家以外にも、北部では中央部とは異なる経済的環境のなかで新興の企業家が形成されつつあった。しかし、北部の企業家の綿業への進出は中央部に比較して大規模には展開されていなかった。また、中央部の移民企業家との結びつきは希薄であった。しかし、中央部の移民資本の再投資先の一部は経済活動が急速に活発化した北部に向けられる場合もあった。当時、北部と中央部との統一市場の形成は緒についたばかりだったのである。

次節において、中央部と北部との経済的結びつきを含め、主要綿業者の第3の特徴として挙げておいたメキシコ国内他部門への再投資をみていこう。

(注1) Rosenzweig, Fernando, "La industria," Cosío Villegas 編, 前掲書, 第1部所収, 140ページ。

(注2) Nicolau D'Olwer, Luis, "Las inversiones exteriores," 同上書, 第2部所収, 1116ページ。

(注3) Del Carmen Collado, María, *La burguesía mexicana, el comercio Braniff y su participación política 1865-1920*, メキシコ, Siglo XXI, 1987年, 60~62ページ。

(注4) *The Mexican Year Book: A Statistical, Financial, and Economic Annual, Compiled from Official and Other Returns, 1911*, メキシコ, 出版年不明, 286ページ。

(注5) Del Carmen Collado, 前掲書, 60~62ページ/Harber, Stephen H., *Industry and Underdevelopment: The Industrialization of Mexico, 1890-1940*, スタンフォード, Stanford University Press, 1989年, 76~79ページ。本稿, 第3節でブラエフの資産構成, 主要企業をあげた。

(注6) SFIM に関しては, Keremitsis, 前掲書, 154~155ページ。

(注7) *The Mexican Year Book*……1911, 286ページ。

(注8) Keremitsis, 前掲書, 129~130ページ。

(注9) CIASA に関しては, Malpica, Samuel, “Crisis de hegemonía socioeconómica y cambio en la distribución de rentas entre obreros y capitalista: el ejemplo de la Compañía Industrial de Atlixco, S. A. (1899-1925),” *Boletín de investigación del movimiento obrero*, フェブラ, 第5年次第8号, 1985年, 91~105ページ。

(注10) *The Mexican Year Book*……1911, 280ページ。

(注11) Keremitsis, 前掲書, 153ページ。

(注12) *The Mexican Year Book*……1911, 289ページ。サンタ・ロサ工場における労働条件については, García Díaz, Bernardo, *Un pueblo fabril del Porfiriato: Santa Rosa, Veracruz*, メキシコ, Fondo de Cultura Económica, 1981年, が詳細な研究をおこなっている。

(注13) ノリエガに関しては, Perez Herrero, Pedro, “Algunos hipótesis de trabajo sobre la inmigración española a México: los comerciantes,” Clara E. Lida 編, *Tres aspectos de la presencia española en México durante el Porfiriato*, メキシコ, El Colegio de México, 1981年, 121ページ。

(注14) 移民が, 工業部門で成功をおさめた理由については山田 前掲論文を参照されたい。メキシコにおいては, 一般的に他のアメリカ大陸の国と比べ, 移民の流入が少ない。第2表に掲載されている1913年時の主要綿業会社のうち, 5大綿企業以外にも, フランス系の会社だとされているものに, 「グアダハラハラ工業会社」がある。

(注15) Patrice, Goux, *Pérégrinations des <Barcelonnettes> au Mexique*, グルノーブル, Presse Universitaires de Grenoble, 1980年, 49ページ。

(注16) バルセロナネットおよびフランス系移民に関しては, Meyer, Jean, “Los franceses en México durante el siglo XIX,” *Relaciones, estudios de historia y sociedad*, 第1巻第2号, 1980年, 5~54ページ/Genin, Augusto, “Le colonia francesa en la República mexicana,” *El florecimiento en México*, メキシコ, 1906年, 228~232ページを参照した。

(注17) 1892年, 1910年の数字は, Meyer, 同上論文, 30~31ページ。1899年の数字は, Nicolau D’Olwer, 前掲論文, 1125ページ。

(注18) García Díaz, 前掲書, 16~19ページ。

(注19) Nicolau D’Olwer, 前掲論文。

(注20) Gamboa Ojeda, Leticia, *Los empresarios de ayer: el grupo dominante en la industria textil de Puebla, 1906-1929*, フェブラ, Universidad Autónoma de Puebla, 1985年, 166~167ページ。

(注21) 同上書 159, 181~200ページ。フェブラの綿企業のうち, フランス人の所有する比較的大きな工場「エル・レオン」, 「コバドンガ」は1920年代にはCIVSAに吸収されている。同上書 12ページおよび123ページ。フェブラ市における綿布生産は中小企業によるマント生産が中心であり, 大企業によるプリント地, 漂白布地生産を中心としていた連邦区, ベラクルス州とは異なっていた。同上書 61ページ。

(注22) 以下, マデロ家の経済活動については, Cerruti, Mario, *Burguesía y capitalismo en Monterrey, 1850-1910*, メキシコ, Claves Latinoamericanas, 1983年, 61~96ページを参照した。

III 移民系綿業者の他産業分野との関係

以上見てきた綿業者たちは, 特に5大綿業会社と関係するフランス系の場合, 商業から身を起し綿業を経て他産業諸分野へ進出するのが一般的であった。本来, 商業と金融業を営んでいた「アヒオティスタ」たちが, 綿業進出と同時に鉄道など政府関係の利権の事業, あるいは伝統的産業分野であるアシエンダ経営, 鉱山経営に進出したのに対して, この時期の移民綿業者は銀行業のほか毛織物業, 鉄鋼業, 製紙業, ビール産業, タバコ製造業など多様な製造業分野に進出したことが特徴として挙げられる。

他の産業分野への展開を具体的に示そう。綿業の内部においても経営者が重なっていることは前節で指摘しておいたが, 他の産業との連関をみる

とフランス系移民企業家間のまとまり、企業家グループの存在が一層明らかになる。

フランス系綿業者は銀行業部門の経営陣に名を連ねていた。特に、「ロンドン＝メキシコ銀行」(Banco de Londres y México)、「メキシコ・ナショナル銀行」をはじめとするメキシコ市に本店を置く銀行の全てにおいてフランス系綿業者の名前を取締役会名簿に見ることができる。「ロンドン＝メキシコ銀行」は1864年にイギリスに本店を置く「メキシコ・南米＝ロンドン銀行」(London Bank of Mexico and South America)の支店として設立されたメキシコで初めての銀行であり、89年には独立し本店をメキシコ市に置いた。その後、フランス系資本の進出はめざましく、ポルフィリアート期末には、「パリ・ペイバ銀行」(Banque de Paris et Pays Bas)が同銀行の有力株主であった。「メキシコ・ナショナル銀行」の場合には、「フランコ・エジプト銀行」の総裁であったノエツリンの創設(1881年)によるもので、既述のとおりかれはCIDOSAをはじめとする綿業会社などに融資をおこなっていた「メキシコ工業金融会社」(SFIM)をも創設した。「メキシコ・ナショナル銀行」はパリにも役員会を置いていた。両者は発券銀行であり、特に後者は政府の銀行としての役割も持ち、内外債の取り扱いを独占するメキシコ第1の銀行であった。1910年時において両者で国内貯蓄残高の約78%、発券総額の約62%を占めていた^(註1)。

このように、メキシコの中心的銀行はイギリス、フランス金融業者によって創設された。上記2銀行の場合、その株式はメキシコ市、パリ、ロンドンの証券取引所で売買されている。「ロンドン＝メキシコ銀行」の資本金の45%以上はフランス系、「メキシコ・ナショナル銀行」の資本金のうち、3分の2は外資であったと言われている。

同銀行は「フランコ・エジプト銀行」、「商工業信用会社」(Société de Credit Industriel et Commercial)、「パリ・ペイバ銀行」の支配下に置かれており、さらに、有力な株主としてベルリンの「ブライクロデル社」(S. Bleichroder)があった。他に、イギリスやアメリカ合衆国の銀行とのつながりも明らかになっている^(註2)。

こうしたなかで、メキシコ中央部において国内資本を代表したのがメキシコ在住のフランス系移民企業家であった。19世紀前半期の「アヒオティスタ」が独自の金融業を営んでいたのに対して、この時期には国際的な金融機構のなかにメキシコの金融業は取り込まれていたのである。「メキシコ・ナショナル銀行」の場合、前節であげた綿業者ガルサン、シニョレが取締役となっていたほか、フランス系移民資本家の代表的存在である「ブエン・トノたばこ会社」の創設者ピュジベ(1875年に移民)、リマントゥール(Limantour)家と合同で金融業を営むシェイレール(Hugo Scherer)の名前が見られる^(註3)。リマントゥール家は1831年にメキシコに移民し、その後武器を中心とする輸入商として自由主義派政府と結びつき、財をなした「アヒオティスタ」である。ポルフィリアート後期においてリマントゥール家は不動産業、金融業を営みメキシコ有数の資産家に成長していた。当時の大蔵大臣ホセ・リマントゥール(在任:1893~1911年)は同家の長男であったが、1875年頃メキシコ国籍を取得し、同家の事業は弟フリオが継いでいた。SFIMのメキシコ側代表はブランフの死後はフリオ・リマントゥールであった^(註4)。「ロンドン＝メキシコ銀行」の場合にも、ブランフ、ベルメヒョ、エブラル、ノリエガ、シニョレ、トロンら綿業者が取締役に名を連ねている^(註5)。

フランス系移民企業のなかで綿業を除く代表的

な製造会社としては、「ブエン・トノたばこ会社」、「モクテスマ・ビール会社」、「サン・イルデフォンソ毛織物会社」、「サン・ラファエル製紙会社」が挙げられるが、役員会の構成員が明らかな最後の2企業についてみてみよう。「サン・イルデフォンソ毛織物会社」の場合、取締役はトロン、ピュジベ、エブラル、リオン、レイノであり、ほぼ全員が綿業に関係している。「サン・ラファエル製紙会社」の場合にはトロン、ブラニフ、ルー、エブラルの綿業者の名前がみられ、「サン・イルデフォンソ毛織物会社」との重複が見られる。また、オリサバに工場を所有する「モクテスマ・ビール会社」は同じくオリサバに工場を所有していたCIDOSAと同様の経営陣だったと言われており、取締役の名前が明らかでない会社も経営陣が重複していると想像できる(注6)。

以上述べてきた企業はベラクルス州、メキシコ州、連邦区に工場を持っていた。綿業会社の場合と立地が同一で、メキシコ中央部(ベラクルスからオリサバ、プエブラを経てメキシコ市に至る伝統的通商ルート沿いの地域)の銀行業、製造業はフランス系の移民企業家の支配下にあったとすることができる。

ブラニフの場合には、その死亡時(1905年)における資産内訳が明らかになっている。先に指摘したように、ブラニフはフランス系企業との結びつきが強く、CIDOSA 以外に「ブエン・トノたばこ会社」、「サン・イルデフォンソ毛織物会社」、「サン・ラファエル製紙会社」、「ロンドン銀行」の取締役を務めていた。資産内訳(概数)は、工業部門に45万、不動産21万、銀行14万、貸付10万、商業4万、鉄道3万、鉱山業1万、アシエンダ0.5万であった。工業部門が大きな位置を占めていたことが明らかである(注7)。フランス系移民企

業家は「アヒオティスタ」の19世紀前半期での役割を引き継ぐものであったが、この点で19世紀前半期の「アヒオティスタ」の綿業者と大きな違いを見せている。フランス系移民綿業者の場合も各種資料を見るかぎり鉱山業やアシエンダ経営の比重は少ない。

こうした他製造業への展開は、綿業での成功に支えられていたと考えることができる。「ブエン・トノたばこ会社」(1894年創設)、「モクテスマ・ビール会社」、「サン・イルデフォンソ毛織物会社」(97年創設)、「サン・ラファエル製紙会社」(98年創設)の設立は綿業への進出以後におこなわれている。5大綿業会社各社は、業績がよく、高配当を初期からおこなっていた(注8)。これらの資金が、他の製造業分野に投下されたと考えることができる。

ポルフィリアート後期メキシコでは、その中央部での工業化がフランス系移民を主な担い手として進展したのに対して、北部ではモンテレイを中心にして地元の資本家が鉄鋼業をはじめとする工業化に着手していた。先に述べたマデロ家もその一例である。しかし、北部においては、綿業が工業化を主導したとは言い難い。北部の企業家はアメリカ合衆国南部の綿花取り引きなどの商業やアメリカ合衆国を市場とする牧畜業から生まれ、中央部の企業の形成過程とは異なっていた(注9)。

北部企業へのフランス系移民企業家の経営参加は概して進展していない。例外的に「モンテレイ鉄鋼熔錬会社」(Compañía Fundidora de Fierro y Acero de Monterrey, 1900年創設, 資本金1000万ペソ)の場合には、「シエンティフィコス」(científicos, ピメンテル=イ=ファゴアガ, マセド), フランス系移民企業家(シニョレ, トロン, シュイレール), 北部企業家(フェラーラ, ザンプラーノ)が合同で経営参加して

いる。この会社はラテンアメリカで最初の銑鉄一貫企業であり、1903年にはレール生産も始めている。資金はアメリカ合衆国からも流入した^(注10)。

フランス系移民企業家の同社への参加は、ピメンテル・イニエファゴアガ、マセド、ヌニェス、リマントゥールといった当時「シエンティフィコス」と言われた中央政界の政策立案者との結びつきによるところが大きい。北部企業家の代表的人物であるクレエールも「シエンティフィコス」の一員であった。「シエンティフィコス」の多くはフランス系移民企業に経営者として参加していたし、一方、政府関係の代表的利権的事業である国営鉄道にはフランス系移民企業家が参加していた。北部と中央部との資金的つながりは始まったばかりであったが、ここにみられるように徐々に拡大しつつあった。換言すれば、国内市場の形成が進行していたのである。フランス系移民企業家は決して排他的ではなく、「アヒオティスタ」同様メキシコ政府との結びつきを常に確保していたのである^(注11)。

(注1) メキシコ政府外債のうちフランスが占める割合は約66% (1911年) だと推定されており、諸外国中最大であった。Nicolau D'Olwer, 前掲論文, 1154~1155ページ。当時のメキシコ銀行業については、Ludlow, Leonor; Carlos Marichal 編, *Banca y poder en México (1800-1925)*, メキシコ, Grijalbo, 1986年/Manuel Quijano, José 編, *La banca: pasado y presente (problemas financieros mexicanos)*, メキシコ, CIDE, 1983年を参照した。1910年の預金率, 発券率は, Sanchez Martinez, Hilda, “El sistema monetario y financiero mexicano bajo una perspectiva histórica,” Manuel Quijano 編, 同上書所収, 84ページ。

(注2) Marichal, Carlos, “El nacimiento de la banca mexicana en el contexto latinoamericano: problemas de periodización,” Ludlow; Marichal 編, 同上書所収, 257~261ページ/Hamilton, Nora, *México: los límites de la autonomía del estado*, メキ

シコ, Era, 1983年, 267~268ページ。

(注3) *The Mexican Year Book……1911*, 127ページ。

(注4) リマントゥール家の歴史については, Aston, B. W., “The Public Career of Don Jose Ivez Limantour,” 博士論文, Texas Technology University, 1972年, 3~5ページ, および Bazant, Jan, *Los bienes de la Iglesia en México*, メキシコ, El Colegio de México, 1971年, 211~214ページを参照した。

(注5) *The Mexican Year Book……1911*, 129ページ。

(注6) 同上書 280~289ページ。

(注7) Carmen Collado, 前掲書, 75ページ。

(注8) *The Mexican Year Book……1911*, 280~289ページ。「モクテスマ・ビール会社」については, 設立年が不明である。

(注9) 北部企業家の形成過程については, Cerutti, 前掲書や Wasserman, Mark, *Capitalists, Caciques, and Revolution: The Native Elite and Foreign Enterprise in Chihuahua, Mexico, 1854-1911*, チャペルヒル, University of North Carolina Press, 1984年を参照されたい。

(注10) 「モンテレイ鉄鋼熔錬会社」に関しては, Viscaya Canales, Isidro, *Los orígenes de la industrialización de Monterrey: una historia económica y social desde la caída del Segundo Imperio hasta el fin de la Revolución (1867-1920)*, Librería Tecnológico, モンテレイ, 1971年, 77~78ページ/Cole, William E., *Steel and Economic Growth in Mexico*, オースティン, University of Texas Press, 1967年, 7ページを参照した。同社は, モンテレイの代表的商人ミルモ (Patricio Milmo) の女婿ケリー (Eugene Kelly) が最大の株主で株式の30%を所有していた。ケリーはニューヨークの銀行家であり, ミルモ同様アイルランド系である。フランス系ではシエコレが19%の株式を所有していた。Harber, 前掲書, 75ページ。

(注11) 「シエンティフィコス」とは「科学主義者」の意味で, 実証主義を信奉していた政策者集団であるとともに, フランス系移民企業などの役員に迎えられ, 経済活動にも直接関わっていったグループである。カッツは次のように述べている。「(ポルフィリア

ート期の——引用者)新しい支配者階級のなかで最も勢力のある、また接合的役割を担った部分はシエンティフィコスと言われたグループであった」。Katz, Friedrich, "Mexico: Restored Republic and Porfiriato," Leslie Bethell 編, *The Cambridge History of Latin America*, 第5巻, ケンブリッジ, Cambridge University Press, 1986年, 58ページ。

む す び

以上みてきたように、ポルフィリアート期メキシコの綿業の発展を担ったのは、フランス系を中心にした移民企業家であった。フランス系の場合、その資本の一部はフランス本国から流入したが、フランス系移民資本の性格はメキシコ北部に進出しつつあったアメリカ合衆国資本とは、質的に大きく異なっており、外資ではない。両者の最大の相違点は、第1に、経営のイニシアティブが、あくまでもメキシコ在住の移民のもとにあった点、第2に、資本の再投資先がメキシコ国内の他の産業に向かった点である。この2点に加え、金融・商業からの業務拡大という点、「シエンティフィコス」を通じた政府との密接な関係を考慮すれば、むしろ19世紀半ばの形成期メキシコ綿業の担い手である「アヒオティスタ」との共通性が見いだせる。さらに共通点を指摘すれば、「アヒオティスタ」と呼ばれている人々もまた、別稿で論じたように、18世紀末以降流入した移民だったのである。綿業部門での、「アヒオティスタ」からフランス系移民企業家への経営および所有の移行は、こうした性格の共通性を基礎にして進展した。つまり、フランス系移民企業家の綿業への進出は、第一義的に、「アヒオティスタ」の綿業進出以降のメキシコ綿業の内的発展の延長線上に位置づけられるのである。

フランス系移民企業家の「アヒオティスタ」との最大の相違点は、綿業以外の諸製造業部門への展開に明瞭に示されるように、前者が産業資本家への転化に成功した点である。このことは、メキシコの工業化の進展に大きく寄与した。「はじめに」で提起した問題、すなわち帝国主義期におけるメキシコの工業化開始の理由を考える際には、フランス系移民企業家が綿業以外にも進出する際、大きな役割を果たしたフランス・スイス資本(既述のメキシコ工業金融会社 SFIM)との関係が注意されなければならない。メキシコは北部を除いて帝国主義国による直接的支配を免れていた。しかし、世界史における、帝国主義段階への移行がフランス系移民企業家の活躍するメキシコ中央部を取り込まなかったのではない。フランス・スイス資本は、移民を通じたメキシコへの経済的進出を果たしていた。フランス系移民企業家の成功の要因として重要なことは、「アヒオティスタ」の役割を引き継いだフランス系移民企業家側にとって、このフランス・スイス資本の動向が、有利に働いたという点である。フランス系移民企業家はフランス金融資本の受け皿となり、自らの資本の不足を補うことによって、産業資本への転化を有利に進めることができたのである。

本論から導かれる結論は上記のとおりであるが、最後に、この結論に関連し本稿では分析できなかった残された問題を指摘しておきたい。それは、外国資本と移民資本との関係の性格についてである。本稿では、後者が前者の受け皿となつたと述べたにとどまり、その内容については分析しきれなかった。上記のフランス系移民企業家を通じたフランス、スイスからの資本流入は、古典的帝国主義概念の枠組にはおさまらない。ギャラハー、ロビンソンによる「自由貿易帝国主義論」が

唱えられて以来、研究史上ではさまざまな形態の「帝国主義的」支配のありかたが論じられてきた。そうした論議のなかで、現地エリートを通じた「間接支配」が論議される場合がある。たとえば、インターナショナル・ハーベスター社のエネケン(シザル麻)産業への投資の場合、ユカタン地方のオリガルキー、モリーナ(Molina)家を通じた「間接支配」の形態をとったと言われている。フランス金融資本のメキシコ綿業への投資は、現地綿業者の役割の大きさと、市場の点からみて、エネケン産業の「間接支配」とは異なっている。経営のありかた、資金の動きなど、より精密で多角的な分析をおこなう必要があるだろう。

また、この「間接支配」の問題は、視野を広げて一国的規模で考察する必要もあろう。フランス金融資本は多分野に投資をおこないメキシコ諸産業の工業化を大きく進展させた。また、政府公債の最大の引き受け手でありメキシコ政府への影響力は大きい。さらに、フランス金融資本のメキシコにおける代理人であったフランス系移民企業家とポルフィリアート政権の政策立案者である「シエンティフィコス」との経済的、人的関係は深かった。この点では、メキシコにおいて「従属的資本主義」の形成がおこなわれたということも可能であるかもしれない。

(独協大学講師)